

## 2つの国際会議からみたイスラーム経済研究の現在

長岡 慎介\*

2008年の4月に筆者は、イスラーム経済およびイスラーム金融の専門家が一堂に会する2つの国際会議(第7回イスラーム経済学国際会議、第8回ハーバード大学・イスラーム金融フォーラム)に参加する機会に恵まれた。近年のイスラーム金融の実践の急速な成長に伴って、世界各地でイスラーム経済あるいはイスラーム金融に関する国際会議やセミナーが頻繁に開催されるようになってきているが、筆者が参加した両会議は、それらの会議の中においては、アカデミックな色彩の濃いものであり、近年のイスラーム金融のトレンドを踏まえながらも、中長期的な視点からイスラーム経済やイスラーム金融の特質や課題を捉えることに重きを置いている。その点で、金融の実務家を対象とした他の多くの国際会議やセミナーとは性格を異にしており、学術研究としてのイスラーム経済研究の最前線を把握するには最適な場であるといえる。また、両会議とも継続的な開催が行われていることから、過去のそれぞれの会議で交わされた議論を併せて整理することで、イスラーム経済研究やイスラーム金融研究の主要な潮流を把握することも可能になっている。以下では、両会議の沿革を俯瞰し、筆者が参加した本年の両会議の様子を紹介する。それらを踏まえた上で、イスラーム経済研究およびイスラーム金融研究における近年の研究動向に対する筆者の雑感を簡単にまとめてみたい。

\*

### 1. イスラーム経済学国際会議 (International Conference on Islamic Economics)

#### (1) イスラーム経済学国際会議の沿革

本年の会議で7回目を迎えるイスラーム経済学国際会議の歴史は、1976年の2月21日から26日までの6日間にわたってサウディアラビアのマッカで開催された第1回会議にさかのぼる。第1回会議の開催時期は、折しも商業的なイスラーム金融の実践が中東地域で勃興し始めた時期であり、会議の中心的な争点は、1940年代から散発的に続けられてきた様々な理論的探究の成果を体系的に整理し、実践に対応しうるインプリケーションをいかに提示するかという点にあった。そのため、イスラーム経済研究を個別に行ってきた研究者が初めて一堂に会し、イスラーム経済およびイスラーム金融に関する様々なトピックについての包括的な議論が行われた。その結果、この第1回会議は、一連のイスラーム経済研究を「イスラーム経済学 (Islamic Economics)」という1つの学問領域として認知される契機として多くの研究者によって位置づけられることになり、第1回会議で築かれた人的・物的ネットワークがその後のイスラーム経済研究を牽引していった。このことは、現在に至るまでイスラーム経済研究の拠点となっているいくつもの研究機関・組織(1977年設立のサウディアラビア、キング・アブドゥル・アズィーズ大学附属イスラーム経済研究センター [Islamic Economics Research Center, IERC]、1981年設立のイスラーム開発銀行傘下のイスラーム研究教育機関 [Islamic Research and Training Institute, IRTI]、1984年設立の国際イスラーム経済学会 [International Association for Islamic Economics, IAIE]) がこのイスラーム経済学国際会議の主導によって設立され

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程；日本学術振興会特別研究員 (DC)

たことから、イスラーム経済研究の歴史におけるこの会議の影響力の大きさをうかがうことができる。

イスラーム経済学国際会議は、その後、1983年に第2回会議がパキスタンのイスラマバードで、1986年に第3回会議がマレーシアのクアラルンプールで開催された。1990年代には一度も会議が開催されることがなかったが、上記に挙げた研究機関・組織が活発に研究活動を続けた。そして、21世紀に入ると、2000年に第4回会議がイギリスのラフバラー大学で、2002年に第5回会議がバハレーンのバハレーン大学で、2005年に第6回会議がインドネシアのジャカルタで開催されるなど、イスラーム金融の急成長と世界的な注目に歩調を合わせるように会議自体の開催頻度も高くなってきている。そして、筆者も参加した第7回会議が本年4月にサウディアラビアのキング・アブドゥル・アズィーズ大学で開催されることになった。

## (2) 第7回イスラーム経済学国際会議

第7回イスラーム経済学国際会議は、本年4月1日から3日の3日間にかけて、サウディアラビアのキング・アブドゥル・アズィーズ大学において同大学、同大学附属イスラーム経済研究センター、国際イスラーム経済学会、イスラーム開発銀行、同銀行傘下のイスラーム研究教育機関の共催によって開催された。会議には、イスラーム経済およびイスラーム金融の研究者のほかに実務家やジャーナリスト・出版関係者なども含めてイスラーム世界や欧米各地から約1000名の参加者が集った(参加人数は*Arab News*にもとづく)。なお、東アジアからの参加者は全体を見渡した限り筆者とリヤド在住の香港出身者の2人のみであったが、現地の新聞でも日本からの会議への参加者がいることが紹介されるなど、予想以上に筆者の参加が注目を集めることになり、日本への関心の高さを実感できた。会議の共通課題は、「イスラーム経済学の30年——経済の今日的課題のための解法と応用 (Thirty Years of Research in Islamic Economics: Solutions and Applications of Contemporary Economics Issues)」であるが、これは、今回の会議の主目的が、1976年の第1回イスラーム経済学国際会議によってイスラーム経済学が1つの学問領域として認識されるようになってから約30年を迎えたことを記念し、これまでのイスラーム経済学の研究の軌跡を振り返ることにあることに由来している。なお、主催者の1つであるキング・アブドゥル・アズィーズ大学附属イスラーム経済研究センターは、第1回会議の席での提案をもとに設立されており、同センターにとって、設立30周年を記念する会議となった。

会議では、今回の会議の趣旨を紹介し、イスラーム経済学の30年間の歩みを大きく振り返ることを目的とした初日のオープニング・パネル“Thirty Years of Research in Islamic Economics”と、最終日に行われた会議の成果をまとめあげる結びのパネル“Proposed Strategic Vision for Research in Islamic Economics”のほかに、3つの共通パネル(“Economic Miracle in the Quran”, “Obstacle to Research in Islamic Economics”, “Islamic Economics: Current State of Knowledge and development of the Discipline”)が各日に1つずつ配された。それに加えて、2つの企画パネル(“Duality of Sources in Islamic Economics and its Methodological Consequences”, “Finance and Investment”)、イスラーム経済研究を担ってきた世界各地の研究機関・組織の活動報告を行う2つのセッション、および公募による個別研究発表のための9つのセッション(3つの英語セッションと6つのアラビア語セッション)が設けられた。ちなみに個別研究発表セッションには200本ものペーパーの応募があり、そのうち30本のペーパーが採用されたという。また、初日の夜には、過去のイスラーム経済学国際会議を振り返るビデオ・フィルムが流され、イスラーム経済学国際会議に長年携わってきた研究機関・組

織および研究者個人に対する顕彰が行われた。さらに、2日目の夕方には、国際イスラーム経済学学会の総会も開かれ、それに引き続いて開かれた学会メンバー限定の非公式セッションとしてイスラーム経済研究がカバーすべき研究分野についての車座の討論も行われた。

会議の全体的なトーンとしては、約30年前の第1回イスラーム経済学国際会議を契機として1つの学問領域として認知されるようになったイスラーム経済学が、イスラーム経済研究のための知のフォーラムとしての大きな役割を現在に至るまで果たし続けていることの積極的な意義を再確認し、今日までのイスラーム経済学の種々の成果を踏まえてより望ましいイスラーム経済システムのあり方を今後も追究していこうとするものであった。その一方で、イスラーム経済学の存在意義自体を真摯に捉え返そうとする取り組みもいわゆるイスラーム経済学者といわれる研究者たちによって提起された。例えば、企画パネルの1つである“Duality of Sources in Islamic Economics and its Methodological Consequences”では、基調報告者であるムハンマド・アナス・ザルカー氏によって、これまでのイスラーム経済研究が果たして「イスラーム経済学」という1つの体系化された学問領域として機能してきたのか、という根本的な問いが發せられ、それを承けて、イスラーム経済研究を支える主要なディシプリンであるイスラーム法学の領域と経済学の領域の両者の関係性のあり方や両者を統合した体系化の可能性についてのディカッサントや聴衆の間で活発な議論が行われた。

また、共通パネルの1つである“Obstacle to Research in Islamic Economics”では、同じく基調報告者であるムハンマド・ナジャトゥッラー・スィッディーキー氏が、急速に成長する実践を背景にしてイスラーム経済学の中で最も活発な研究が行われているイスラーム金融研究の現状を批判的に概観し、そこには初期のイスラーム経済研究が常に念頭に置いてきた望ましい経済システム・経済制度像のような理念的なビジョンが欠如していることが指摘され、短期的に有効なテクニカルな研究だけでなく、イスラーム経済システム全体のあり方に関わるグランド・デザインを再構築することをめざす息の長い研究の必要性が説かれた。これらの問いかけからは、イスラーム経済研究が、イスラーム経済学という1つの学問領域としての名称で認知されてから30年を経た現在においても、常に複数の方法論の間を往還することが求められているきわめて流動性の高い研究分野であることが再確認できよう。同時に、イスラーム金融の実践の存在によって、イスラーム経済研究が、単に理念的な絵空事に留まるのではなく、実践の現状を追認するのではなく、常に理念と現実が互いにフィードバックされるようなダイナミズムの中で探究されるものであることが理解できる。

今回の会議の報告者の多くは第1回会議の時代からイスラーム経済学を担ってきたいわゆる大御所たちであり、彼ら大御所の研究指導を受けた次世代の研究者による報告や大学院生の参加は30周年記念の会議という性格もあろうがほとんど見られなかった。しかしながら、各パネルや各セッションの随所において、次世代研究者の育成するための方策についてテキスト・ブックの整備や研究支援制度のあり方といった具体的な施策の提案を伴った形で活発な形で突っ込んだ議論が行われた。このような議題が国際会議というフォーマルな場で本格的に提起されたのはおそらく今回が初めてのことであり、イスラーム経済研究の次世代への引き継ぎが急務であるとの認識が明るみになったという点で言及するに値するであろう。また、イスラーム世界の外に位置する日本にとって特筆すべきなのは、最終日に行われた会議の成果をまとめあげる結びのパネルにおいて、イスラーム経済研究における日本も含めた非イスラーム世界との研究協力の重要性が主催者による会議声明で言及されたという点である。日本におけるこれまでのイスラーム経済研究のほとんどは、イスラーム経済研究の主流ともいえるこの会議の文脈の外部において散発的に行われていたに過ぎず、日本の金融実務家たちのイスラーム金融に対する積極的な姿勢と比べても、学術的な側面における日本の存

在感は無きに等しかった。しかし、これからの日本におけるイスラーム経済研究は、この声明に応えるべく世界的な研究潮流からも注目を集めるような研究水準にまで高めるとともに、外国の研究者から敢えて日本と研究協力をするに値すると思われるような独創性をもって行われるべきであることを筆者は会議終了後、強く痛感した。

## 2. ハーバード大学・イスラーム金融フォーラム (Harvard University Forum on Islamic Finance)

### (1) ハーバード大学・イスラーム金融フォーラムの沿革

本年で8回目を迎えるハーバード大学・イスラーム金融フォーラムは、ハーバード大学の中東研究センター (Center for Middle Eastern Studies, CMES) で1995年から開始されたハーバード・イスラーム金融情報プログラム (Harvard Islamic Finance Information Program, HIFIP) の一環として1997年の5月12日に第1回会議が開催された。そして、1998年から2002年にかけて毎年ほぼ1回のペースで会議が開催された (第2回から第5回まで、2001年を除く)。その後、2004年に、ハーバード大学法科大学院で1991年から行われているイスラーム法研究プログラム (Islamic Legal Studies Program, ILSP) の一環としてイスラーム金融プロジェクト (Islamic Finance Project, IFP) がスタートすると、この会議もその中に組み込まれることになった。イスラーム金融プロジェクトに組み込まれてからは、2年に1回のペースで会議が開催されるようになり、2004年に第6回会議が、2006年に第7回会議が開催され、筆者も参加した第8回会議が本年4月に開催されることになった。

前節で取り上げたイスラーム経済学国際会議と比べてときのハーバード大学による一連の研究プロジェクトの特徴は次の2点が考えられる。1つには、イスラーム経済に関するあらゆるトピックを検討の対象とするイスラーム経済学国際会議とは異なり、ハーバード大学のプロジェクトでは研究トピックそのものをイスラーム金融に絞っている点である。その中でも特に重点的に研究を行っているのが、イスラーム型金融派生商品やイスラーム保険、ストラクチャード・ファイナンスのようなイスラーム金融が現在進行形で切り開いている新規分野におけるイスラーム法と金融技術との関係性に関するトピックについてである。その意味で、ハーバード大学における研究はイスラーム経済学国際会議と比べて相対的に実践に近いところで行われているといえる。もう1つの特徴としては、これまで世界各地で蓄積されてきた多彩なイスラーム金融関連の研究を網羅的に収集し、書誌情報とともに個々の研究の概要をも収めたデータベースを構築することに力点を置いているという点である。このことは、長年にわたってイスラーム経済研究の成果の蓄積とデータベースの構築のあり方について研究を行ってきたナズィーム・アリー氏を本研究プロジェクトのリーダーとして迎え入れていることからその姿勢をうかがうことができる。すでに、このデータベースは稼働を始めており、イスラーム金融研究における学術的なデータベースとしては、きわめて有用なものとなっている。

### (2) 第8回ハーバード大学・イスラーム金融フォーラム

第8回ハーバード・イスラーム金融フォーラムは、本年4月19日と20日の2日間にわたって、ハーバード大学法科大学院のオースティン講堂にて開催された。開催日前日の18日の午後には、イスラーム金融の手法を用いたマイクロ・ファイナンスの可能性を議論するプレ・フォーラム・ワークショップも催された。会議への参加者は500人ほどで、主にアメリカ国内から集まった研究者や実務家および大学院生で占められていたが、イスラーム金融を専門としている参加者の割合は筆者の印象では多くなく、金融分野の関係者がほとんどであったように思える。会議の共通課題は、「イ



スラーム金融におけるイノベーションと真正性 (Innovation and Authenticity)」であり、急速にその取り扱い分野が拡大しているイスラーム金融において市場からの需要に応えうる金融商品のイノベーションとイスラーム的な適合性とのバランスをいかにとっていくのかという時機を得た会議の内容となった。

会議は、初日のオープニング・セッションと2日目のファイナル・セッションのほかに、共通議題を冠したパネル・ディスカッションと4つの企画セッション (“Law, Policy and Supervision”, “Conceptual Direction in Shari’a”, “Debt and Equity Modes of Financing”, “Financial Integration”), それに博士取得から間もない次世代研究者による発表が行われた公募セッション (“Current Academic Research”) が設けられた。オープニング・セッションでは、かの有名なブラック・ショールズ方程式の証明によってノーベル経済学賞を受賞しているロバート・マートン氏とイスラーム経済学を長年にわたって牽引してきたウマル・チャブラ氏による2本の基調講演が行われた。両講演とも、昨年来、アメリカ経済に大きな影響を及ぼしているサブプライム問題への言及がなされ、イスラームの教義にもとづいた金融システムの中に、そのような在来型金融の構造的な問題点を克服する術が内在しているのかについての問題提起と検討がなされた。会議のすべてのセッションを通じて、この論点に対する聴衆の関心は高く、各セッションの質疑応答の場面では、当該の報告内容 (例えば、スクークのようなイスラーム型証券化の構造の説明) に対して、金融の専門家や実務家から経済システムの不安定な変動に対する頑健性の観点からの質問が相次いだ。そのような突っ込んだ問いに対しては報告者が必ずしも説得的な返答をしたとはいえないという印象を筆者は得たが、このことは、不安定化する世界の金融システムの現在の趨勢に対してイスラーム金融がどのような比較優位を発揮できるかという問題に対して、イスラーム金融研究の最前線に立つ研究者の間でも十分な検討が行われておらず、今後開拓されるべき重要な研究分野であることを示しているといえよう。

次世代研究者による発表が行われた公募セッションでは、サービスを利用する側のイスラーム金融に対する認識のあり方をイギリスのムスリム・コミュニティにおける戸別調査から検討した研究や、イスラーム金融商品が関わる紛争処理における英米法とイスラーム法の関係のあり方をイギリスの事例をもとに考察した研究など、従来のイスラーム金融研究では未開拓であった新しい観点からの興味深い報告が多く見られた。また、会議前日のプレ・フォーラム・ワークショップにおいて、イスラーム金融にもとづくマイクロ・ファイナンスの可能性を議論の俎上に載せたことは、在来型金融と競合しうるイスラーム金融商品におけるイスラーム法と金融技術の関係を重点的に研究してきたハーバード大学の研究プロジェクトにとって新しい領野を開拓するものであったといえよう。イスラーム金融の将来的な方向性について大胆な提言をし続けているマフムード・エル＝ガマール氏が当該ワークショップのチェアを務めたことは筆者からすればそのことを端的に象徴しているように思えた。

\*

以上で簡単に紹介してきた2つの国際会議における議論や全体的なトーンを踏まえるならば、イスラーム経済研究およびイスラーム金融研究の現状をどのように見ることができるだろうか。1970年代のイスラーム金融の実践の商業的な勃興以降のイスラーム経済研究の歩みは、自らの研究成果をいかに現実に反映させるかという理念から実践へのベクトルと、実践の要請に応じうる理論的な裏付けをイスラームへのレジティマシーの範囲の中でいかに生み出せるかという実践から理念への

ベクトルのせめぎ合いの連続であったといえる。この2つのベクトルを本稿で見てきた2つの国際会議にいささか強引に当てはめるならば、イスラーム経済学国際会議は前者のベクトル（理念→現実）、ハーバード大学・イスラーム金融フォーラムは後者のベクトル（現実→理念）を代表する知のフォーラムであるように捉えることができるのではないか。1990年代までの両ベクトルのせめぎ合いの歴史については、すでに筆者が本雑誌（『イスラーム世界研究』）の第1巻第1号における論考（「金融機関のリストアップと分類の特徴に見る現代イスラーム金融の理念的類型——イスラーム経済学史の構築にむけて」）で詳細に論じているので、ここで細かくは繰り返さないが、第1回、第2回のイスラーム経済学国際会議での議論の成果を取り入れた1980年代前半のイラン・パキスタン・スーダンにおける経済のイスラーム化の施策が1980年代後半になってことごとく失敗したことが明らかになったことで、それ以後、イスラーム経済研究のトレンドが、前者のベクトル（理念→現実）から後者のベクトル（現実→理念）へシフトしていったことは明らかである。このことは、1986年から2000年の間にかけてのイスラーム経済学国際会議の「沈黙（一度も会議が開催されないという意味）」からも、やや穿った見方ではあるが読み取ることができるだろう。

しかしながら、2000年代に入ってからイスラーム金融の実践の急速な拡大と成長、および在来型金融への金融商品のメカニズムの接近という現状と、サブプライム問題に端的に現れている在来型金融システムの不安定性の増大という事態を目の前にして、現実→理念というベクトルによって牽引されてきたイスラーム経済研究（特に、イスラーム金融研究）に対する危機感が特にアカデミズムに籍を置く研究者の中から少なからず噴出し始めているように思える。それは、上記で挙げた2つのベクトルの攻守逆転（現実→理念のベクトルから理念→現実のベクトルへ攻守逆転）という単なる先祖返りではなく、イスラーム経済の理念が何であるか、そしてイスラーム経済が担うべき実践が何であるべきかを同時に捉え直すことを志向する動きであるように思われる。そのことは、本年のイスラーム経済学国際会議の場において、イスラーム経済学の下に行われてきた研究のあり方自体を真摯に反省し、イスラームの理念にもとづいたイスラーム的に望ましい経済システム・制度のあり方をグランド・デザインとして提示する必要があるという問題提起が好意的に受け入れられたことからいえることであるし、本年のハーバード大学・イスラーム金融フォーラムにおいて、在来型金融とは一線を画すイスラーム金融のポジティブな特徴を問いただす聴衆からの質問が多く寄せられたことや、プレ・ワークショップにおいてマイクロ・ファイナンスという新たな研究領域が取り上げられたことから、そのような根本的なイスラーム経済のあり方を問う必要性が理解できると思われる。

イスラーム金融の実践の華々しい成長が日本においてもニュースとして見聞きするまでになり、イスラーム経済研究もそのトレンドに同期しさえすればよいとの見方が各所でささやかれるようになってきているが、イスラーム経済研究の学説史の流れや今回の2つの国際会議への参加によって把握できた最新のアカデミズムにおける動向を踏まえるならば、そのような見方が単に「時流に踊らされている」だけであることは明白である。イスラーム経済に対するポリシー・インプリケーションを提示することを必ずしも直接的には目指していない日本におけるイスラーム経済研究のあり方については、世界的な研究動向とはまた別のあり方を模索すべきであると筆者は考えるが（これについては稿を改めて論じる必要がある）、イスラーム金融の華々しい側面だけに目を奪われてはいけないという戒めを得ることができただけでも、今回の2つの国際会議への参加は十分意義深いものであったといえる。